を真剣な御面持でじっと聞かれて、「よく承りました。加藤先生にくれぐれもよろしくお伝えして下さい」とのように答えられたが、そのときの田中少宮司の真摯な御態度も、印象深く脳裡に残っている。

あの御殿場の一日のこと、私にとって極めて重要であり、加藤玄智博士記念学会でどれだけのことをしなければならぬか、よくよく肝に銘じながら、力の及ばぬことである。

学労窟の遺芳

大妻女子大学　望月　真

炎天下に終戦四十周年を迎え、往時を偲び実に感無量なものがあります。復員後の遍歴の中で乃木神社の恩賚により親しく加藤先生に師事できた時は蘇生の思いでした。神社復興に日夜尽瘁されていた高山貴名誉宮司の至誠心に感応され、先生の晩年は乃木聖雄の鑽仰のために捧げられました。先生はよく「高山大人」と云われ、その実践躬行に意気投合し、乃木精神の闡明に心血を注がれました。先生と中学の同窓で、元國學院大學の石川岩吉学長は昭和三十一年発行の「知性と宗教」―聖雄信仰の成立―の序に「著者の長い学的生活は一に此の問題と決死の取組みを試み、遂に是れを克服したものと云えよう」と寄せられています。「神道の宗教発達史的研究」の大著など、東方学院の院長中村元博士もその学問的価値に賛辞を呈しておられます。乃木将軍の高邁なご生涯に神の光を仰ぎ、開眼されたと述懐されていました。学労窟の近くの鎮守の社（厳島神社）の前を通られる時、いつも拝礼された敬虔なお姿が尊く偲ばれます。お弁当の割箸も使い捨てにせず、必ず洗って何回も使用され、乃木将軍がそうなさったと云われました。生活費も事欠く時、終始先生のお世話をされた杉浦千代様は青梅市の大洋園で余生を過されています。近在の人でも老博士を慕って教を乞うことがしばしばでした。畑作のお手伝いの

老人にも、ご自分でお茶の接待をされ閑談されるのが常でした。

すでに先立たれた節子夫人に、十文字高女で国語を教えていただいた柳田喜代子様が田園調布本町におられます。川崎市立橘高校はじめ、長年にわたり国語教育に貢献され、有為な人材を養成されました。明治神宮の献詠会で歌道にも精進されてきました。先生がなくなられる前夜、柳田様の夢枕に立たれ、大変お世話になりましたと深く頭を下げられたとのことでした。柳田様は今も先生の多摩墓地にかかさず参詣し、清掃もされています。

拙宅に三十年近く掲げられている古い額があります。「放満手」の三文字で、「昭和丁酉春日　為望月真君藤玄」とあり、乃木神社で華燭の典を挙げていただいた記念の有難い揮毫です。これも柳田様のご芳志でした。

先生は東京下町の由緒ある寺のご出身でしたが、当時の既成仏教にあきたらず、大学で宗教哲学を専攻され、明治四十二年の学位論文は「知識と信仰」でした。道元禅師の「正法眼蔵」辨道話の巻に、愛誦して止まない「この法は、人々の分上にゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、証せざるにはうることなし。放てば手に満てり云々」が見えます。

先生から直接承ったことですが、学生時代に明治の名僧として聞えた西有穆山老師（文政四年―明治四十三年）の高風を慕い、縁あって法座に列し、大きい感銘を受けられたそうです。西有禅師は青森県三戸のご出身で九歳の時、八戸の長流寺で出家され、二十一歳より江戸駒込吉祥寺の栴檀林で学ばれ、後には小田原海蔵寺の月潭全竜に「正法眼蔵」を学んで精通したといわれます。明治三十四年には鶴見の総持寺独住第三世となり、直心浄国禅師と勅賜されました。東大文学部在学中、小生も駒込吉祥寺内にあった宗門学徒の為の栴檀寮に寄宿させていただき、実に奇しき縁でした。出雲の大社教や岡山の黒住教、社寺学校関係等、藤玄学会の会員は実に多士済々です。拙宅の近くの練馬区の尼寺で曹洞宗管長をされた高階瓏仙老師の掛軸を拝見しました。「人各有二因縁一莫レ羨レ人」の警句です。老師も会員名簿にご尊名が拝さ

れました。

昭和三十年改訂された「宗教学精要」の序に「衰眼の私を助けて本書の撰作に大なる協力を惜しまれなかった、望月真君に御礼を述べて置く」とのお言葉を賜りました。吾師懐慕の情は尽きることなく、後日また、師恩報謝と斯道宣揚のため執筆の機縁をいただきたく切に念じて止みません。

加藤先生の学恩を偲んで

愛宕神社宮司　鎌田太一

加藤玄智博士が昭和四十五年八月に亡くなられ、その没後十年の記念講演会を國學院大學の講堂で催されてからも十年を経過した。寔に月日の経つことの早さを今更乍ら痛感して止まない。

昭和二十五年の秋、時の乃木神社高山宮司様のお伴をして暗くなった御殿場の駅に降りて東山の学労窟迄小一里の間、真暗な路を期待と不安の気持で参上し、一夜親しく神道についてお話を承った温顔を忘れることが出来ない。

其の後、加藤先生が、乃木神社信仰要説「吾が行く神の道」を著作されるについて、先生の口述筆記のお手伝いをさせて頂き、続いて明治神宮の手によって「神道書籍目録」の続編が刊行されることとなって、当時の文化課主任権禰宜原口さんと共に、当時明治神宮権宮司伊達先生のお伴で屢々参上し、熱意をこめてお教え頂いたことは有難いの一言につきる。先生の学問(神道)に対する真摯な態度、経済的に大変御不自由な中を杉浦千代様が全く献身的に御世話され、お伺いする度に乏しい中から精一杯の御馳走をして頂いた真心も忘れることが出来ない。

先生が学者として最後迄立派な学績を残され、大往生を挙げられた一半は、杉浦様に負う所が多かったと、その功績を称えたい。